大原社会問題研究所五十年史

III 本格的事業の展開から東京移転まで〔一九二三～三六年〕

河上博士の入所問題と櫛田研究員の東京転勤

この年の人事関係の動きで注目されることは、河上博士の嘱託就任をめぐる交渉と、櫛田民蔵氏の東京転勤である。研究所で『剰余価値学説史』を翻訳出版する計画の進行中に、高野氏は河上氏の協力を要望したが、同氏はこれを断り『資本論』初版首章の翻訳をしたいと申出たことは前にも記したが、これらの交渉中に櫛田氏は「長谷川氏は嘱託を辞したいとの意向であり、河上氏はその代りに嘱託になりたいとの意思をもっている。この際自分も嘱託になるから河上氏の就任を実現してはどうか」と高野所長に申出ている（五月一二日）。しかし高野氏は長谷川、櫛田両氏の地位の変更は聴きいれず、河上氏の嘱託就任は翻訳事業への参加を通じて実現したいと考え、櫛田氏を通じてその交渉を行った。河上氏の就任問題はこの後も長くつづき、翌一九二六年にも再燃するのであるが、ついに実現を見るにいたらなかった。

櫛田氏は九月初め、東京に在勤したいとの強い希望を表明、同月一五日の委員会では、東京における資料蒐集と研究所関係の出版に関する同人社の相談役となることを条件に、櫛田氏の転勤を承認した（氏は一一月に東京に移り、それ以後一九三四年死去にいたるまで東京在勤であった）。

この年高野所長は労働科学研究所の運営に側面的援助をあたえたり、中央統計委員会の事業や労働者教育について多面的な活動を行った*。

*たとえば、この年の初めから、しばしば火曜会に出席し、森戸、河上、杉山氏らと労働組合問題、無産政党結成問題等につき意見をのべ、労働教育協会では安部磯雄、細野三千雄氏らと教育組織等について討論した。この年の五月、総同盟の分裂があったが、高野氏は三月の総同盟大会を傍聴している。このほか国際労働協会の会合にも出席したが、年末には大阪労働教育会館設立の中心となり、会館の管理委員長となった。その後この会館における労働学校の講義には、研究所の研究員も多数出講した。またこの年の六月高野氏は帝国学士院の会員に推薦され、秋には産業労働調査所の顧問となった。なおこれらの点については、前掲『高野岩三郎伝』にくわしく記されている。

年末大阪事務所の煖房工事が完成した。また、櫛田氏の東京転勤後、東京事務所は神田西紅梅町の同人社社屋に移転した。

法政大学大原社会問題研究所五十年史
発行　1970年11月
編・発行法政大学大原社会問題研究所